

スポーツによるコミュニティ形成と「生活圏」に関する社会学的考察

— 神戸市・垂水区団地スポーツ協会を事例として —

伊藤 恵 造

Community Reorganization through Sports and the “Sphere of Daily Life” Based on a Case of Tarumi-ku, Kobe in Japan

ITO, Keizo

Abstract

In order to deal with the issue currently facing Japan of its aging society, a “living in proximity” phenomenon has begun in which a family resides in separate residences within a neighborhood, and their lifestyle consists of mutually visiting each other. Upon investigation of solutions to regional lifestyle issues, it becomes clear that relationship models with examples of physical closeness are important.

Arguments in regards to community reorganization through sports have been negligence in regards to actually proving whether or not sports activities can create a sense of connection within the sphere of daily life. Thus, we examine the relationship of local sports club member’s attributes and residences, as well as the types of sport.

It is clear that based on the characteristics of each sport’s activities, sports become a place for activities outside of an individual’s sphere of daily life, and that sphere differs depending the type of sport. In addition, it can be asserted that there is a need to plan community reorganization depending on the characteristics of each regional community and for the characteristics of each type of sports activity.

Key Words

“living in proximity”, aging society, physical space, type of sports activity

はじめに

「一つの家族が近所の別々の住宅に住み、互いに行き来しながら生活を成り立たせている現象」を、建築学の 大月敏雄は「近居」と呼んだ（大月・住総研編，2014）。「何メートル離れていれば近居なのか、何分までどどり着ければ近居なのか、そして家族はどこまでが家族なのか」（大月，2014：6）。定義が未だ曖昧な用語を大月があえて提示した背景には、今日の日本の都市社会が抱える超高齢化の問題とそれへの対応がある。深刻化する孤独死・孤立死等の地域課題に対する居住者自身による自助努力の結果として、「近居」の現象がすでに起こり始めている。このことは、地域の生活課題の解決策を検討する上で、物理的に近い範囲における関係形成が重要となっていることの現れである。

これまでスポーツによるコミュニティ形成に関する議論では、スポーツ活動が日常生活圏における関係形成に貢献することが主張されてきた。例えば黒須充は、近年の地域スポーツ政策の中心的位置を占めてきた総合型地域スポーツクラブ（総合型クラブ）を取り上げ、その活動が目指すべきは「地域のコモنز」の創出であると主

張している。「総合型クラブとは、単に地域住民の運動・スポーツ活動を促進することだけが目的ではありません。スポーツを通して築いた人と人とのつながりや助け合いの関係を身近な日常生活圏で生み出す地域組織としての役割が期待されています。そうした意味で総合型クラブとは、『スポーツのクラブ』ではなく、『地域のクラブ、地域のコモنز』を目指さなければならないのではないのでしょうか」（黒須，2014：188）。このように、スポーツによるコミュニティ形成をめぐるのは、身近な日常生活圏内で「つながりや助け合いの関係」を生み出すことを前提とした議論が展開されてきた¹。

しかしながら、この「地域のコモنز」という用語が、先行する他領域におけるコモنز論²の援用によるものではないことから明らかなように、この主張は、スポーツ振興政策の推進のための一つの理念型を提示しているに過ぎない。スポーツ活動が日常生活圏内の関係性を創出するものであるかどうかは、その実証作業を経てから結論付ける必要があるだろう。本稿では、そのための一つの試みとして、地域スポーツ組織のメンバーの属性と居住地、そしてスポーツ種目の関係性の分析から、今後

の都市におけるスポーツによるコミュニティ形成を検討していくための研究視点を提示することを目的とする。

1. 都市における「関係性創出とスポーツ」と「生活圏」

1.1 都市論における「関係性創出とスポーツ」

では、近年の関係性創出を論じた都市論において、スポーツはどのように取り上げられてきているのだろうか。例えば、高橋英博は、フィットネスクラブにおいて叢生しつつある「半匿名の関係」が秘める新たな都市的な社会関係の形成にとっての積極的な意味や可能性に注目している（高橋，2007）。高橋は、「人々のあいだには、伝統的な集団に所属することよりは、自己の多様な価値観にもとづいたネットワークを形成することのなかで生活や仕事、人生の生きがいを見出すという自己実現志向が強まっている。（中略）フィットネスクラブを媒介とする他者との「半匿名」的な交流は、そのネットワークを広げる一つの契機とみなすこともできる」と指摘している（高橋，2007：228）。

また、久繁哲之介は、市民と地域が豊かになるための具体策の一つとして、「街中の低未利用地に交流を促すスポーツクラブを創る」ことを提言している（久繁，2010）。久繁は次のように言う。「スポーツクラブは、体を動かす『スポーツ空間』と、おしゃべりと飲食で口を動かす『交流空間』から構成される。スポーツクラブで過ごす時間は普通、交流空間の方が長い。この傾向は、高齢者や女性ほど高い。つまり、スポーツクラブはスポーツが好きな男性だけでなく、高齢者や女性にとってはことさら貴重な『交流空間』となる」（久繁，2010：227）。

一方、高井昌史は、フィットネスクラブという都市における「画一化された空間」が、多くの客によって、むしろ「飼いならされている」ことを指摘している（高井，2013）。高井は、「階層による仲間意識であろうが、『疑似家族』の形成であろうが、それは本来フィットネスクラブに期待されていたものではない。『画一化された空間』のなかに、階層性に担保された趣味嗜好や、家族的な人間関係への欲望がもちこまれ、客自身がその空間の意味を勝手に創り変えてしまったのだ」と指摘する（高井，2013：213）。

以上のことから明らかなように、特に民間のスポーツクラブ（フィットネスクラブ）を主な事例として、スポーツと関係性創出とを関連付けた議論が展開されてきている。しかしながら、そこではスポーツが創出する「半匿名」の関係形成等の積極的な機能が注目されてきた一方で、居住地や物理的距離と関連づけながら関係性創出が論じられることはなかった。

1.2 手がかりとしての「生活圏」

なぜ、関係性創出とスポーツが論じられる際に、居住地や物理的距離の問題が取り上げられないのだろうか。このことを探る手がかりとして、『都市社会学原理』を著した鈴木栄太郎（1969）の「生活圏」の議論を参照してみたい。

鈴木は、都市住民が生活上の必要のために物資を購入したり技術や施設を利用したりする地域は、事実上、決して奔放無制限なものではなく、次のような「三重の生活圏」となって現れているという。一つ目は、近隣的地区（第一生活地区）である。この地区は日常生活に必要な日々更新しなければならないものを購入する地区である。すなわち、八百屋や魚屋、雑貨屋など、日々の買い物をするいろいろの種類の商店の一群が、自分の住居を中心として取り巻いている領域である。二つ目の副都心地区（第二生活地区）は、第一生活地区で求められないか、または求められるとしても望ましい買い物がないため、この要求を満たす必要上訪れるやや遠距離の種々の種類の商品の存するところ（繁華街）である。三つ目の都心地区（第三生活地区）は、その都市での最高級の商品を求め得るところ（繁華街）である。

鈴木は、こうして三つの地区を示したうえで、「都市の社会的統一性はこの第一生活地区における社会関係の連続的統一に見出だし得るに相違ない」と聚落社会としての都市の領域を明示した。そして、「（購買現象のみならず、：引用者）同様に基礎的な生活必需と認められる衣食住、厚生、信仰、教育、娯楽等のための不可欠な社会過程も、ほとんどみなその都市内で充足されているのではないかと述べた（鈴木，1969：379-380）。そのうえで鈴木は、都市における「余暇的現象」に関して次のように指摘する。「もし、都市外の人々との社会的接触を必要とするものありとすれば、それは生活の余力から生ずる余暇的現象にすぎないのではないかと。都市には余暇的現象が多いが、都市に住む人々の生活のあらゆる方面の基本的必要は、みなその都市内のほかの人々との社会的接触のみによって満たされ得るのではないかと。（鈴木，1969：380）。

鈴木は、「都市における社会生活の基本的構造の研究」（鈴木，1969：20）に取り組むため、都市の「正常人口の正常生活」の概念を措定した。鈴木は言う。「都市の社会の基本的な構造は、正常な生活をもととして、その上に構築されているに相違ない」。しかし、「現実の都市は、混沌雑然として本幹も枝葉も見分け難い。故に、幹の正しい姿をみるためには、葉を一応落としてみる事が必要である」（鈴木，1969：24-25）。こうした前提に立つ鈴木にとって、スポーツ組織は、世帯における生活の余暇か職場または学校における生活の余暇の中に生じて

いる「生活拡充集団」として捉えられ、「生活と社会の基盤はそこには存しない」集団として位置づけられることになる。

関係性創出とスポーツが論じられる際に、居住地や物理的距離の問題が取り上げられない理由としては、都市においてスポーツは「生活の余力から生ずる余暇的現象にすぎない」ものであり、生活地区に関わりを持たないものと認識されてきたことが考えられよう。はたして、スポーツ活動の範囲は、メンバーの居住地（住居）と生活地区（生活圏）に関わりのない広がりをもつものなのだろうか。それとも、「地域のコモンズ」という理念型に示されたように、ある一定の範囲に限定されたものなのだろうか。このことを明らかにするために、本稿では、地域スポーツ組織のメンバーの属性と居住地、そしてスポーツ種目の関係性の分析を通じて、スポーツ活動と「生活圏」との関連について検討してみたい³。

2. 対象事例および調査の概要

2.1 「垂水区団地スポーツ協会」の概要

本稿が対象とする「垂水区団地スポーツ協会」は、調査実施時の2013年7月現在、延べ会員数は1,244名で、野球部、バレーボール部、ゴルフ部、マイテニス部、マイピンポン部、卓球同好会、社交ダンス部、みるみるくらぶ⁴、シニア野球部、ダーツ部、CSB（クレマチス・サタディ・ベースボール）、矢元台公園管理会という11の部と1つの公園管理会で組織されている。1969年10月に開催された神戸市垂水区主催の団地対抗ソフトボール大会をきっかけに、同年12月に野球部、バレーボール部、卓球部の3部で活動をスタートした。それ以降、30種類近くの部等が発足・解散され、今日に至っている（図1）。

各部の活動場所は種目ごとにさまざまだが、活動拠点とされるのは、各種会議等が行われるクラブハウスが建

つ矢元台公園である。ここは野球の試合も行われるほどの近隣公園としては広い公園（2ヘクタール）で、兵庫県内最大規模（198ヘクタール）の明石舞子団地内の垂水区側に位置している。垂水区には、1966年に造成事業が開始された明石舞子団地をはじめとして、新多聞団地（事業開始1971年、193ha）、上高丸団地（事業開始1965年、6.5ha）など、同時期以降に建てられたいくつかの団地がある。垂水区は大阪や神戸へと通うサラリーマン世帯のベッドタウンとして、多くの人たちを受け入れた。2010年10月現在、94,016世帯に220,411人が暮らしており、高齢化率は24.8%である。

2.2 調査の概要

調査の概要は、表1に示した通りである。各部等の人数については、垂水区団地スポーツ協会が発行している「垂水区団地スポーツ協会の現況（2013年7月現在）」、および、「年代別会員数（2013年5月1日現在）」を参考にした。なお、本調査結果の分析は、2005年から断続的に実施しているフィールドワークの成果を踏まえて行うこととした。

3. 調査結果の概要

3.1 各部等のメンバーの性別・年代について

各部等のメンバーの性別・年代については、表2に示した通りである。全員が女性のバレーボール部（472人）と全員が男性の野球部（314人）に多くの部員が所属している。また、野球部、バレーボール部、CSB以外の部は、高齢者を中心に構成されている。

3.2 各部等の主な活動場所について

各部等の主な活動場所については、表3に示した通りである。

既述の通り、矢元台公園（クラブハウスおよび野球場）

表1 調査の概要

1. 調査名	「垂水区団地スポーツ協会」会員の皆様へのアンケート												
2. 調査時期	2013年2月～6月												
3. 調査方法	配票調査法（2013年2月の役員会の際に各部長に部員分の質問紙を配布、4月開催の総会の際に各部長から事務局長に提出し、その後、事務局長から一括して調査票を調査者宛に郵送。その後、期日を遅れて提出された調査票を6月に事務局長から調査者に郵送。）												
4. 調査対象 (内訳)	「垂水区団地スポーツ協会」会員延べ1,244人												
	野球部	バレーボール部	ゴルフ部	マイテニス部	マイピンポン部	卓球同好会	社交ダンス部	みるみるくらぶ	シニア野球部	ダーツ部	CSB	矢元台公園管理会	
	314	472	82	68	22	17	12	46	85	14	97	15	
5. 回収数	127	363	51	32	21	15	8	33	52	10	49	10	
6. 回収率	40.4%	76.9%	62.2%	47.1%	95.5%	88.2%	66.7%	71.7%	61.2%	71.4%	50.5%	66.7%	
7. 調査内容	(1) 「垂水区団地スポーツ協会」とのかかわり (2) ご自身とご家族について (3) 地域での日常生活活動について												
8. その他	複数の部等に所属している場合、回答は1回のみ。												

を主な活動場所とする部が多い。

3.3 複数の部等に所属している会員数

複数の部等に所属している会員数（本調査の回答者のみ）については、表4に示した通りである。みるみるくらぶ（21人）、マイピンポン部（15人）など、矢元台公園クラブハウスを主な活動場所とする部等の人数が比較的多くなっている。

3.4 月当たりの平均参加回数

月当たりの平均参加回数（他の部等の活動を含む）については、表5に示した通りである。矢元台公園管理会が最も多く（8.7回）、次いでダーツ部（6.5回）、マイピンポン部（6.0回）、卓球同好会（5.7回）と、矢元台公園クラブハウスを主な活動場所とする部等の回数が多くなっている。

3.5 世帯構成（%）

世帯構成については、表6に示した通りである。矢元台公園管理会とゴルフ部が「夫婦のみ」世帯中心であるのに対して、バレーボール部と野球部は「夫婦と未婚の子ども」世帯中心である。

3.6 現在の住所に居住した時期（%）

現在の住所に（両親や祖父母も含めて）居住した時期については、表7に示した通りである。矢元台公園管理会、ダーツ部、マイピンポン部の多くが1970年代以前に居住し始めているのに対して、CSB、野球部、バレーボール部の半数以上は1990年代以降に居住し始めている。

3.7 居住形態（%）

居住形態については、表8に示した通りである。全体

表2 各部等のメンバーの性別・年代

部 名	計	男女別	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80～
野 球 部	314	男 314	6	57	100	87	29	22	12	1
		女 0	0	0	0	0	0	0	0	0
バレーボール部	472	男 0	0	0	0	0	0	0	0	0
		女 472	0	0	66	180	155	56	15	0
ゴ ル フ 部	82	男 64	0	0	1	0	2	21	35	5
		女 18	0	0	0	1	1	11	5	0
マイテニス部	68	男 32	0	0	1	3	4	20	4	0
		女 36	0	0	0	5	9	18	4	0
マイピンポン部	22	男 0	0	0	0	0	0	0	0	0
		女 22	0	0	0	0	0	1	18	3
卓 球 同 好 会	17	男 0	0	0	0	0	0	0	0	0
		女 17	0	0	0	0	3	8	6	0
社 交 ダ ン ス 部	12	男 6	0	0	0	0	0	1	3	2
		女 6	0	0	0	0	0	4	2	0
みるみるくらぶ	46	男 13	0	0	0	0	2	2	9	0
		女 33	0	0	0	0	1	2	26	4
シニア野球部	85	男 85	0	0	0	0	13	43	28	1
		女 0	0	0	0	0	0	0	0	0
ダ ー ツ 部	14	男 3	0	0	0	0	0	0	3	0
		女 11	0	0	0	0	0	0	10	1
C S B	97	男 85	5	41	28	8	3	0	0	0
		女 12	0	9	3	0	0	0	0	0
矢元台公園管理会	15	男 10	0	0	0	0	0	0	8	2
		女 5	0	0	0	0	0	0	5	0
男 女 別 合 計	1,244	男 612	11	98	130	98	53	109	102	11
		女 632	0	9	69	186	169	100	91	8
年 代 別 合 計	1,244	1237	11	103	198	282	222	209	193	19
○男 女 比……	1対1.032		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80～

表3 各部等の主な活動場所

主な活動場所	所在地	活動する部等
矢元台公園野球場	神戸市垂水区	野球部, シニア野球部, CSB
矢元台公園クラブハウス	神戸市垂水区	マイピンポン部, 卓球同好会, 社交ダンス部, みるみるくらぶ, ダーツ部, 矢元台公園管理会
垂水体育館	神戸市垂水区	バレーボール部
西神戸ゴルフ場	神戸市西区	ゴルフ部
明石公園テニスコート	明石市	マイテニス部

※垂水区団地スポーツ協会事務局発行の「垂水区団地スポーツ協会の現況（2013年7月現在）」を参考に作成した。

表4 複数の部等に所属している会員数（本調査の回答者のみ）

部等名称	野球部	バレーボール部	ゴルフ部	マイテニス部	マイピンポン部	卓球同好会	社交ダンス部	みるみるくらぶ	シニア野球部	ダーツ部	CSB	矢元台公園管理会
(人)	5	2	6	0	15	1	0	21	1	8	0	5

表5 月当たりの平均参加回数（他の部等の活動を含む）

部等名称	野球部	バレーボール部	ゴルフ部	マイテニス部	マイピンポン部	卓球同好会	社交ダンス部	みるみるくらぶ	シニア野球部	ダーツ部	CSB	矢元台公園管理会
平均(回/月)	1.7	4.8	1.4	5.3	6.0	5.7	3.5	3.8	3.5	6.5	1.5	8.7

表6 世帯構成 (%)

部等名称	野球部	バレーボール部	ゴルフ部	マイテニス部	マイピンポン部	卓球同好会	社交ダンス部	みるみるくらぶ	シニア野球部	ダーツ部	CSB	矢元台公園管理会
1. 単身(ひとり暮らし)	19.7	2.8	2.0	6.3	57.1	20.0	25.0	39.4	11.5	60.0	40.8	10.0
2. 夫婦のみ	19.7	14.3	70.6	56.3	23.8	40.0	25.0	48.5	50.0	20.0	6.1	80.0
3. 夫婦と未婚の子ども	52.8	74.9	23.5	31.3	14.3	33.3	37.5	9.1	32.7	20.0	40.8	10.0
4. 三世帯	4.7	7.7	2.0	6.3	0.0	6.7	12.5	0.0	1.9	0.0	12.2	0.0
5. N. A.	3.1	0.3	2.0	0.0	4.8	0.0	0.0	3.0	3.8	0.0	0.0	0.0
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

表7 現在の住所に（両親や祖父母も含めて）居住した時期 (%)

部等名称	野球部	バレーボール部	ゴルフ部	マイテニス部	マイピンポン部	卓球同好会	社交ダンス部	みるみるくらぶ	シニア野球部	ダーツ部	CSB	矢元台公園管理会
1. ~1945年	0.8	1.4	5.9	0.0	0.0	6.7	0.0	0.0	3.8	0.0	2.0	0.0
2. 1945~1949年	1.6	2.5	2.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.0	0.0	0.0	4.1	0.0
3. 1950年代	0.8	3.9	2.0	3.1	4.8	0.0	0.0	3.0	9.6	10.0	6.1	0.0
4. 1960年代	3.1	5.2	7.8	6.3	33.3	6.7	25.0	39.4	9.6	50.0	0.0	50.0
5. 1970年代	14.2	9.1	27.5	3.1	42.9	33.3	25.0	24.2	13.5	40.0	8.2	50.0
6. 1980年代	13.4	17.9	29.4	50.0	9.5	6.7	37.5	6.1	23.1	0.0	14.3	0.0
7. 1990年代	26.0	25.3	15.7	28.1	0.0	33.3	12.5	9.1	21.2	0.0	8.2	0.0
8. 2000年代以降	39.4	34.2	7.8	9.4	9.5	13.3	0.0	15.2	15.4	0.0	57.1	0.0
9. N. A.	0.8	0.6	2.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.8	0.0	0.0	0.0
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

的に、持ち家（分譲）の比率が高くなっているが、シニア野球部と野球部では「賃貸の集合住宅」、CSBでは「住宅・官舎・寮」の割合が他に比べて高くなっている。

3.8 現在の職業 (%)

現在の職業については、表9に示した通りである。社交ダンス部、矢元台公園管理会、ゴルフ部、シニア野球部の多くが「退職した」人を中心に構成されているのに対して、野球部、CSBの8割以上は「フルタイムの仕事」に従事している。

3.9 通学先・通勤先 (%)

通学先・通勤先については、表10に示した通りである。多くの部等のメンバーが神戸市内および明石市内への通学・通勤経験がある。

3.10 居住地について

垂水区団地スポーツ協会会員および各部等のメンバーの居住地については、図2~4に示した通りである。各図では、主な活動施設を白色の丸印(○)、居住地を黒色の丸印(●)で示した。居住地については、「~丁目」

表 8 居住形態 (%)

部等名称	野球部	バレーボール部	ゴルフ部	マイテニス部	マイビンボン部	卓球同好会	社交ダンス部	みるみるくらぶ	シニア野球部	ダーツ部	CSB	矢元台公園管理会
1. 一戸建て持ち家	33.1	58.1	82.4	50.0	52.4	40.0	50.0	42.4	48.1	20.0	32.7	20.0
2. 分譲の集合住宅	33.9	26.4	15.7	40.6	38.1	46.7	37.5	51.5	17.3	70.0	14.3	80.0
3. 一戸建て借家	3.1	0.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.9	0.0	0.0	0.0
4. 賃貸の集合住宅	25.2	9.6	0.0	3.1	9.5	13.3	12.5	6.1	26.9	10.0	18.4	0.0
5. 社宅・官舎・寮	3.9	2.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	34.7	0.0
6. その他	0.0	1.4	2.0	3.1	0.0	0.0	0.0	0.0	3.8	0.0	0.0	0.0
7. N. A.	0.8	0.8	0.0	3.1	0.0	0.0	0.0	0.0	1.9	0.0	0.0	0.0
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

表 9 現在の職業 (%)

部等名称	野球部	バレーボール部	ゴルフ部	マイテニス部	マイビンボン部	卓球同好会	社交ダンス部	みるみるくらぶ	シニア野球部	ダーツ部	CSB	矢元台公園管理会
1. 在学中	0.8	0.0	2.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.1	0.0
2. フルタイムの仕事	89.0	21.2	15.7	31.3	4.8	20.0	12.5	15.2	26.9	0.0	87.8	0.0
3. 退職した	8.7	40.8	76.5	46.9	38.1	46.7	87.5	45.5	71.2	20.0	2.0	80.0
4. フルタイム経験なし	0.0	24.5	3.9	12.5	33.3	20.0	0.0	27.3	0.0	60.0	4.1	10.0
5. N. A.	1.6	13.5	2.0	9.4	23.8	13.3	0.0	12.1	1.9	20.0	2.0	10.0
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

表 10 通学先・通勤先 (%) ※ 上記 (8) で「フルタイム経験なし」の場合は N. A.

部等名称	野球部	バレーボール部	ゴルフ部	マイテニス部	マイビンボン部	卓球同好会	社交ダンス部	みるみるくらぶ	シニア野球部	ダーツ部	CSB	矢元台公園管理会
1. 垂水区	8.7	22.0	7.8	0.0	4.8	20.0	12.5	3.0	17.3	0.0	2.0	20.0
2. 明石市	5.5	1.4	2.0	15.6	0.0	6.7	25.0	3.0	0.0	0.0	2.0	0.0
3. 垂水区以外の神戸市	55.9	24.2	45.1	21.9	19.0	20.0	37.5	33.3	51.9	20.0	61.2	40.0
4. 神戸市・明石市以外の兵庫県	28.3	6.6	11.8	34.4	9.5	0.0	25.0	9.1	13.5	0.0	18.4	30.0
5. 大阪府	1.6	5.5	13.7	6.3	4.8	6.7	0.0	0.0	13.5	0.0	10.2	10.0
6. 京都府	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.0	0.0
7. その他	0.0	3.9	7.8	0.0	0.0	13.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
8. N. A.	0.0	36.4	11.8	21.9	61.9	33.3	0.0	51.5	3.8	80.0	4.1	0.0
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

までの回答をもとにし、同じ回答の場合は重ねて表示した⁵。

図 2 は、全会員の居住地と主な活動場所を示したものである。地図中の境界線は行政区域を表している。多くのメンバーが居住している図中央部の行政区が垂水区である。垂水区の西（左）側に隣接する横長の行政区が明石市、北（上）側に隣接する比較的大きい行政区が神戸市西区、東（右）側に隣接するのが神戸市須磨区である。東側には、須磨区に続いて、長田区、兵庫区、そして神戸市中心部の中央区がつながっており、JRの垂水駅から中心部の三ノ宮駅までは、普通電車でも 30 分以内で到着する距離にある。メンバーは、神戸市内や隣接する行政区のみならず、西は姫路市から東は尼崎市まで、兵庫県内の広い地域に居住している。

では、各部メンバーの居住地にはどのような特徴があるのだろうか。以下では、紙幅の都合上、特徴がみられたバレーボール部と野球部の結果のみを示す。

図 3 は、バレーボール部メンバーの居住地と主な活動場所の垂水体育館の位置を示したものである。バレーボール部は、そのほとんどのメンバーが垂水区内居住者で構成されていることがわかる。また、区外居住者はいずれも神戸市内の他区に居住しており、全会員が神戸市に居住している。

図 4 は、野球部メンバーの居住地と主な活動場所の矢元台公園野球場の位置を示したものである。矢元台公園を主な活動場所とする他の部等の多くは、公園周辺に居住するメンバーが中心であるのに対して、野球部は、兵庫県内に広く居住していることがわかる。なお、同じく野球場を利用する他の 2 つの部（シニア野球部、CSB）も同様に、公園から離れた地域に居住している。

4. メンバーの属性・居住地とスポーツ種目の関係性

垂水区団地スポーツ協会のメンバーの属性・居住地とスポーツ種目の関係性の分析を行うために、調査結果を

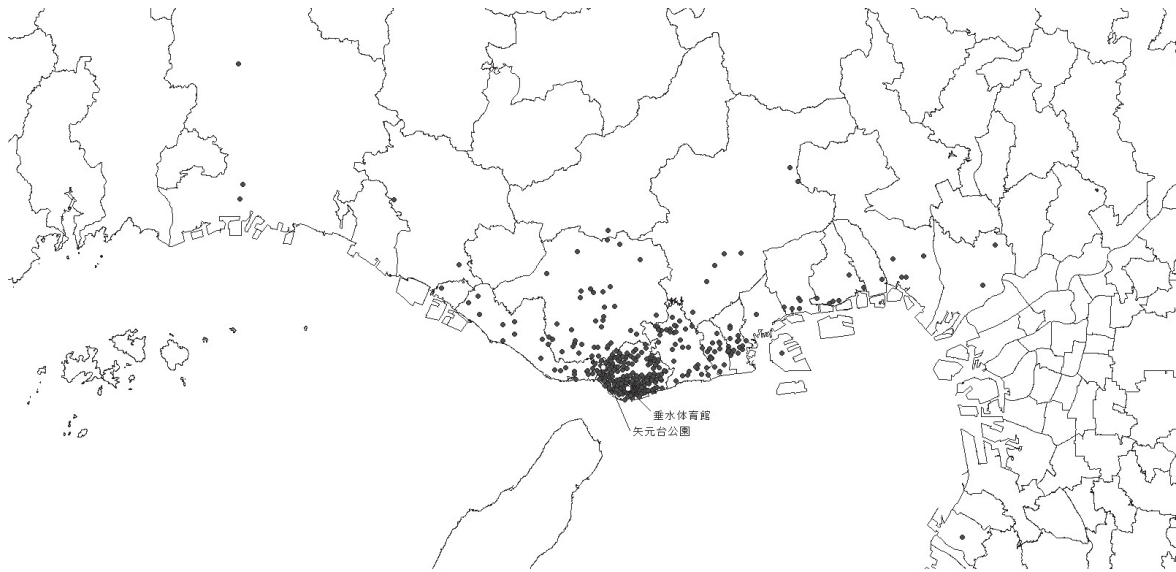


図2 垂水区団地スポーツ協会 全会員の居住地

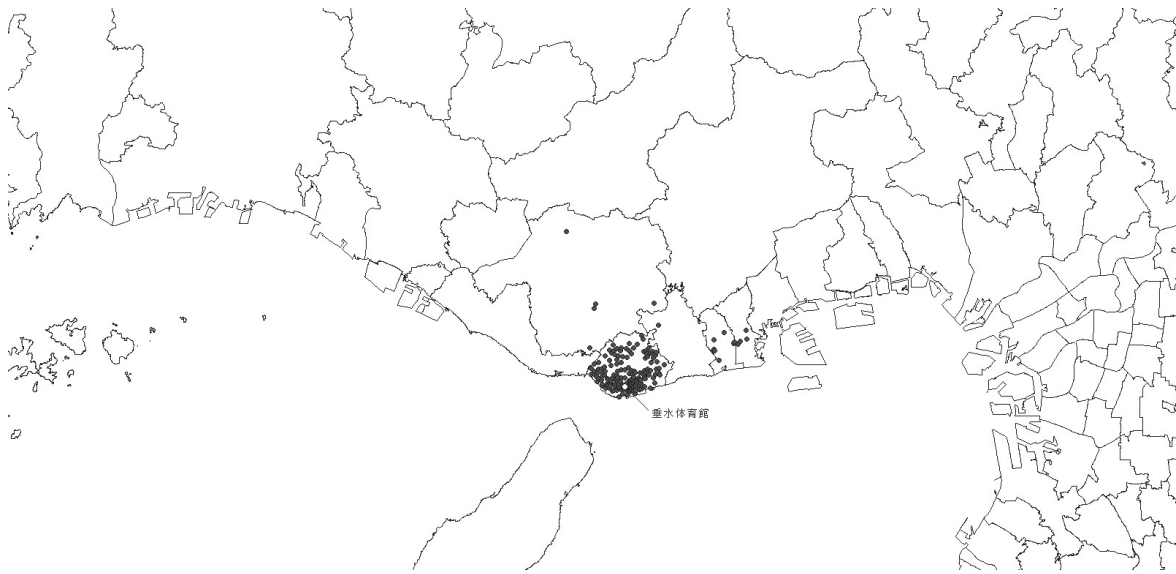


図3 バレーボール部メンバーの居住地



図4 野球部メンバーの居住地

表 11 メンバーの属性・居住地とスポーツ種目の関係性

グループ	性別	年代	居住地	日常生活圏との関係
バレーボール部	女性（「主婦」中心）	30～70代	垂水区区内中心	生活圏内の活動
クラブハウスを活動拠点とする部等	女性>男性	50～80代	矢元台公園周辺	生活圏内の活動
野球場を活動場所とする部	男性中心	10～80代	広域	生活圏外の活動

踏まえて、各部等を3つのグループに大別した(表11)⁶。

一つ目のグループとして挙げられるのが、バレーボール部である。世帯構成や現在の職業に関する回答結果から、そのメンバーの多くが「主婦」あるいは母親であるものと考えられる。ここで特徴的なのは、図3で見たように、その居住地が、垂水「区」という行政区を主な範囲としていることである。これらのことから推察されるのは、「主婦」・母親のスポーツ活動が日常生活圏内で行われているということである。高度経済成長期に都市郊外に移り住んだ世帯の多くは、男性が職場へと通うサラリーマンで、居住する地域の住民活動を支えたのは「主婦」・母親である女性であった。それゆえ、当時の郊外における地域活動では、母親が活躍することになる(玉野, 2005)。そうした日常生活圏内の関係性の中でバレーボールを楽しむことが、彼女たちにとっては都合のよいものであった。そこには、すでに形成された関係性の中で楽しみたいという思いもあるが、そのことだけが理由ではなかったと考えられる。彼女たちは長時間にわたって家を空けることができず、限られた時間でスポーツを楽しむためには、身近な日常生活圏内の施設で活動する必要があったからである⁷。

二つ目のグループとして挙げられるのが、矢元台公園のクラブハウスを活動拠点とする部等である。このグループの特徴は、矢元台公園の周辺地域に居住しているメンバーが多いことであり、そのことはつまり、高齢者が多いことを意味する。これらの部はいずれも活動回数が比較的多く、矢元台公園を定期的に利用し、そこを「居場所」として活動していることがうかがえる。現在、矢元台公園管理会が近隣住民を中心にして構成されているのも、公園やその周辺を日常的に利用する人びとが、そこを綺麗にしたいと思うようになり、次第に管理活動に関わりを持ち始めたという経緯がある⁸。いわばこのグループは、矢元台公園という物理的な共有空間を基点にして活動する部等の集合体である。

三つ目のグループとして挙げられるのが、野球部、シニア野球部、CSBの矢元台公園を拠点として野球を行っている部である。このグループには、メンバーの居住地が広範囲にわたっているという特徴がある。なぜ、遠方からこの公園まで野球をしに来るのか。その理由の一つは、野球場の管理方法にある。神戸市内の他の野球場はインターネットによる申し込みを行い、抽選でその利用

が決定される。それに対して矢元台公園は、垂水区団地スポーツ協会が利用の調整を行っているため、定期的にそこを利用することが可能となっている⁹。この野球場の使いやすさが広範囲に居住する人びとを集めているものと推察される。図1の部等の結成状況に示されているように、近年になって野球をプレーする部が増加している理由もこの点にある¹⁰。

5. まとめにかえて

本稿では、今後の都市におけるスポーツによるコミュニティ形成を検討していくための研究視点を明らかにすべく、垂水区団地スポーツ協会メンバーの属性と居住地、そしてスポーツ種目の関係性について検討してきた。調査結果が示したのは、各部等によってメンバーの居住地の範囲が異なることであった。またこのことは、日常生活圏の中で行われているスポーツ活動と、その外で行われているスポーツ活動の両方が存在する可能性があることを示していた¹¹。そしてその状況は、スポーツの種目等によって、そこに参加する部員の年齢や性別、生活履歴や居住形態が異なることが要因となって生み出されているものと推察された。

以上のことを踏まえて、都市社会の日常生活圏における関係形成について指摘できるのは次の点である。表11から明らかなように、3つのグループは、居住地のみならず、性別や年代にも違いがある。スポーツによるコミュニティ形成を検討していく際、「スポーツ」を一括りにするのではなく、その種目や活動内容によってそこに参加するメンバーの性別、年代、居住地等が異なることを視野に入れて進めていくことが必要である。また、日常生活圏における関係形成を想定した場合、とりわけ、その種目が創り出す人びとのスポーツ活動の範囲(メンバーの居住地の範囲)による異同を踏まえた検討が必要になる。例えば、バレーボール部のように、生活圏を共有する人びとによるスポーツ活動は、高齢化によりその衰退が指摘される自治会等の行政区を単位とした住民組織とメンバーの重なりが大きいと考えられることから、バレーボール部で創られた関係が生活圏内の生活課題の解決の契機を提供する可能性を有していることができるだろう。

一方、野球場を活動場所とする部では、生活圏を共有しない人びとによるスポーツ活動が行われている。この

活動は、高齢化が進む地域に存在する野球場に、“現役世代”の人びとを集めるとい現象を生み出している。高齢化が進む地域の生活圏におけるコミュニティ形成を考える場合、野球のような「生活の余力から生ずる余暇的現象にすぎない」スポーツの特徴を利点として活かすことも必要だろう。公園周辺住民で構成されることから、メンバーの高齢化が進む矢元台公園管理会の作業に、野球をする“現役世代”の人びとが加わり始めていることは、その利点の具体例として挙げられよう。

[注]

- 1 日常生活圏を離れて行われるスポーツには、「スポーツ・ツーリズム」という新たな名称が与えられることになる(工藤, 2006)。
- 2 例えば、本稿の問題関心に近いものでは、フィールドワークを踏まえた「コモンズの社会学」を展開する井上・宮内編(2001)や、都市を含めた公共空間をコモンズの視点から論じた間宮・廣川編(2013)などがある。
- 3 本稿では鈴木(1969)が示した「第一生活地区」を日常生活圏と想定して議論を進めることとする。郊外のショッピングモールや「ネットスーパー」などの普及により購買圏が拡大する今日であっても、土地に固定された住居で暮らす限りにおいて、この圏域は一定の有効性を持つものと考えられるからである[鈴木, 1969:43]。なお、鈴木(1969)を「読み直す」ことの意義については、大谷(2015)において論じられている。
- 4 みるみるくらぶは、その名称が示すとおり「なんでもやってみる」ことを目的とした部であり、その内容は、「体の中をのぞいてみる(体成分検査)」、「秋の夜長にクラシックを楽しんでみる」、「みんなで年越しができることを喜び合ってみる」、など多岐にわたっている。スポーツに限らず、部員の関心に合わせて柔軟にその内容を決められるよう工夫がされており、高齢者を中心に人気の部となっている。
- 5 図の作成にあたっては、谷謙二氏作成のフリーソフトウェア「MANDARA」を使用した。
- 6 なお、分析の過程で、ゴルフ部とマイテニス部は3つのグループから除外することとなった。これらの部にも独自の特徴がみられると予想されるが、その分析はここでは省略せざるを得ない。
- 7 バレーボール部の記録(垂水区団地スポーツ協会バレーボール部, 1990)には、次のように記されている。「(1973年に:引用者)それまでの総当りのリーグ戦を3チーム毎のリーグ戦とした。それは母親が一日中家を留守にする試合ではなく、家族を送り出した後、試合に行き、できるだけ午前中に試合を終え、家族の帰りを待つ余裕のあるものにしたかったからである」(垂水区団地スポーツ協会バレーボール部, 1990:2)。
- 8 矢元台公園管理会の活動の展開過程については、拙稿(伊藤・松村, 2009)を参照いただきたい。

- 9 その他、その理由には、利用料金や駐車場など、いくつかの要因がある。そのことの地域社会における意義を説明するには、別稿を用意する必要がある。
- 10 図1に記載されている「矢元台倶楽部」も、矢元台公園で野球を楽しむ部の一つである。
- 11 本稿では、メンバーの「生活圏」の範囲の実態について論じることはできなかった。今後の課題としたい。

[文献]

- 久繁哲之介(2010)『地域再生の罫一なぜ市民と地方は豊かになれないのか?—』筑摩書房
- 井上真・宮内泰介編(2001)『コモンズの社会学—森・川・海の資源共同管理を考える—』新曜社
- 伊藤恵造・松村和則(2009)「団地空間における公園管理活動の展開とその変容—垂水区団地スポーツ協会の事例—」『体育学研究』, 54(1), 107-121
- 工藤康宏(2006)「スポーツイベントとツーリズム」, 川西正志・野川春夫編『生涯スポーツ実践論—生涯スポーツを学ぶ人たちに—』市村出版, pp.98-101
- 黒須充(2014)「おわりに—スポーツ・コモンズ—」, 黒須充・水上博司編『スポーツ・コモンズ—総合型地域スポーツクラブの近未来像—』創文企画, pp.183-189
- 間宮陽介・廣川祐司編(2013)『コモンズと公共空間—都市と農漁村の再生に向けて—』昭和堂
- 大谷信介(2015)「社会学研究の再構築にむけて」, 大谷信介・山下祐介・笹森秀雄編『グローバル化時代の日本都市理論—鈴木栄太郎「都市社会学原理」を読み直す』ミネルヴァ書房, pp.1-23
- 大月敏雄(2014)「まえがき」, 大月敏雄・住総研編『近居—少子高齢社会の住まい・地域再生にどう活かすか—』学芸出版社, pp.3-6
- 大月敏雄・住総研編(2014)『近居—少子高齢社会の住まい・地域再生にどう活かすか—』学芸出版社
- 鈴木栄太郎(1969)『都市社会学原理増補版(鈴木栄太郎著作集Ⅵ)』未来社
- 高橋英博(2007)『都市と消費社会の出会い—再魔術化する仙台—』御茶ノ水書房
- 高井昌史(2013)「都市空間を飼いならす〔フィットネスクラブ〕」, 近森高明・工藤保則編『無印都市の社会学—どこにでもある日常空間をフィールドワークする—』法律文化社, pp.204-215
- 玉野和志(2005)「母親たちの挑戦」『東京のローカル・コミュニティ』東京大学出版会, pp.117-200
- 垂水区団地スポーツ協会バレーボール部(1990)『団スポバレー20年のあゆみ』

付記：本稿は、JSPS 科研費 24700641 の助成による研究成果の一部である。